

はじめての

万葉集

[vol.25]

日本に現存する最古の和歌集『万葉集』をわかりやすく紹介します。

吉野のアユ

古代から賞味されていた魚にアユがあります。アユは記紀万葉にもみられ「年魚」「鮎」「安由」「細鱗魚」などと表記されます。平安時代の辞書には、春に生まれ夏に大きくなり、秋に衰えて冬に死ぬために「年魚」と名付けられたと解説されています。

日本各地の河川に生息しているアユですが、県内では吉野川がとくに有名で『万葉集』にもみられます。右の歌は大宰府赴任中の大伴旅人が吉野離宮を偲んで詠んだもので、懐古する吉野の景に「年魚走る」という表現が使われています。

『日本書紀』（応神天皇十九年十月朔条）には、吉野川近くに住む国樞が「栗・菌および年魚の類」といった品々を献上したことが記されています。

はやひと
隼人の湍門の磐も年魚走る
吉野の滝になほ及かずけり

大伴旅人
巻六 九六〇番歌

（訳）隼人の瀬戸の岩石のすばらしさも、鮎の走りおよび吉野の急流にはやはり及ばないことだなあ。

古代の漁法は、梁（巻十一の二六九九番歌など）や網代（巻七の三三五番歌など）を使っていたことがうかがえますが、「隠口の 泊瀬の川の 上つ瀬に 鵜を八頭潜け 下つ瀬に 鵜を八頭潜け 上つ瀬の 年魚を食はしめ 下つ瀬の 鮎を食はしめ……」（巻十三の三三三〇番歌）とあることから、鵜飼によってアユを得ていたことがわかります。

また記紀や『肥前国風土記』には、神功皇后が肥前国（現在の佐賀県）松浦の玉島の川にて、裳（スカート）の糸を抜いて釣り糸とし、飯粒を餌としてアユを釣ったという話のついでです。ちなみに友釣りは江戸時代中期から始まったそうです。

今年のアユ釣りは、記紀万葉に思いをせながら釣り糸を垂れてみてはいかがでしょう。

（本文 万葉文化館 小倉久美子）



アクセス

近鉄吉野線下市口駅
大淀町コミュニティバス旧大淀病院前下車 南へ約80m



鮎の放流(写真提供:大淀町)

吉野川近くにある大淀町下淵の鈴ヶ森行者堂で「鮎供養」が毎年6月1日に行われます。行者が鮎の供養と川の安全を祈願し、水槽に入った生きた鮎を前に般若心経などを唱え法要。その後、近くの吉野川で川岸から花を添えて、鮎が1匹ずつ放流されます。

鮎供養

